

小畑二郎著

『ケインズ思想——不確実性の倫理と 貨幣・資本政策』

(慶応義塾大学出版会, 2007年11月)

鈴木芳徳

1. 畢生の力作

この書物は、まさにこの著者ならでは書けなかったであろう作品である。というのは、著者がこれまで『アメリカの金融市場と投資銀行業』(1988)について研究を進められ、またJ. ブキャナンに就いて学びつつ、『倫理の経済学』(1997)を翻訳したという意欲的な研究歴の帰結として本書を読むことができるのであって、そうした意味では、他の追随を許さない性格のものとなっている。

まず、書物の章節に就いて、あらましを紹介しておこう。

第一部 新古典派経済学の原点：マーシャル経済学の基礎

第一章 マーシャル経済学の社会思想的な背景

第二章 マーシャルの企業と市場の経済学

第三章 マーシャルの分配理論

第二部 ケインズ経済学における革新

第四章 ケインズ政治経済学の主題

第五章 「貨幣論」とケインズ革命の展開

第六章 雇用問題の主題化

第七章 ホートレイ・ケインズ論争の再評価

第八章 貨幣経済の時論的研究におけるパラダイム転換

第九章 ケインズ革命を超えて

補論 ケインズ初期の倫理学的研究の再評価

第一章 ケインズの哲学的探求とムーア「倫理学原理」

第二章 ケインズの「確率論」

第三章 ケインズ倫理学の歴史的地平

こうした構成の中で、著者が重視するのは、「読みの連鎖(chain of reading)」であって、とりわけ、第一部ではマーシャルとの連鎖、第二部ではケインズの主要著作の間の、或いは同時代の経済学者との間の連鎖、そして補論ではムーアやヴィトゲンシュタインとの連鎖が重要視されている。

ところで、かねてからケインズにおける倫理学と経済学との関連をどう理解するかという問題が西欧の学界で提起されてきていることは周知の通りである。この問題についても本書は、厳密にして周到な考察を加えている。

すなわち、従来、初期ケインズの『確率論』に代表される倫理学的研究と、後期ケインズの『一般理論』に代表される経済学理論の研究との間には断絶があり、これら両者は切り離して別々のものとして考えるのが当然、というのが一般的な意見であった。さらにケインズは後になると政治的レベルでの政策提言に傾斜してゆくのであって、倫理的な見地からはいよいよ遠ざかっていった、と見るのが通常であった。

しかし、事柄はそう単純ではない、というのが著者の力説するところである。このところは重要な点であるので、著者自身の言葉に聞くことにしようと思う。すなわち、「ケインズ初期の倫理学的研究について詳しく調べると、それは、経済学研究と無関係であるどころか、人々の行動の動機に関する洞察や独自の政治哲学をつうじて、経済学研究の重要な出発点となっていることが明らかとなる。それまでのほとんどの経済学が依拠してきた功利主義的な道徳原理や政治哲学を乗り越える論点が、そこではすでに示されていたのである。ベンサム流の功利計算や利得計算にだけ依拠する経済人が想定されるのではなく、不確実な将来に対して、さまざまな程度の信念 (belief) に基づいて行動する人々が社会の指導的な部分を構成するものと想定されていた。」かくて「人間の行動原理に関する倫理的な洞察の転換によって、経済学の内容は、根本的に変化せざるをえなくなる。」(序 iii頁)

経済学の基盤における大転換、それが倫理的見地からする研究によって可能とされた、というのが著者の主張である。それは、著者もさまざまな箇所であられるように、例えばヒュームにおける人性論、スミスにおける道徳情操論といった永きにわたる社会科学の歴史の

厚みを受け止めてのもの、学問的考察の歴史の重みを感じさせる成果でもあるのである。

他方、ケインズの経済学を、例えばマクロ経済学の一つとして扱うことも可能であり、世上、普通に行われている取り扱いはそのようなのであるが、しかし、ケインズの思考に沿って考え、その内面に及んで思考の展開を見るということになると、そうした扱いでは十分さが残るのは当然であろう。しかも、或る観点から——例えば新古典派の観点から——ケインズを裁断するということになるに至っては、生きたケインズ理解には程遠いものとならざるをえないのである。

本書はあくまでもケインズに沿い、その想源を尋ねつつ、ケインズのもつ妙味を伝えようとする、滋味掬すべき著書となっている。また、読者に語りかける際の語り口は、生きたケインズを伝えようとする著者の意気込みを、抑制の効いた表現の中にも感じさせるものとなっており、引き込まれて読み、考えさせるものとなっていることも特に記しておくべき特徴の一つである。かくて、一大楽曲のごとくにケインズ思想を包括的に捉え、編成された力量にはなみなみならぬものがあり、畢生の力作と評さるべきものである。

2. 本書の一大特徴

本書には様々の点で、これまでの先行研究を凌駕するものとなっているのであるが、その最大のポイントは、先にも少しく触れたように、ケインズにおける『確率論』研究の意義を積極的に明らかにしたところにあるといつてよい。『確率論』は、ケインズ著作集の中で未だに邦訳のない、難解な書物であるが、それをこま

で読解したのは初めてかと思われる。

ケインズ思想の展開については、かねてから欧米の研究者の間で「メイナード・ケインズ問題」（バイトマン）として論争があったところである。それは、アダム・スミスに関して、『道徳情操論』と『国富論』との関連について「アダム・スミス問題」が論じられたのにならったものであるが、要するにそれは、前期ケインズと後期ケインズとを連続しているとする「連続説」と、むしろ断絶しているとする「不連続説」との対立であった。この論争は、欧米で1980年代以降、ケインズにおける哲学的倫理的側面の読解が進捗するにつれて盛んとなったものであって、端的にいうならケインズを「philosopher-economist」として読もうとする動向が生じたことによるものである。すなわち、「連続説」に立つキャルベリ（Carabelli, A.）やローソン（Lawson T.）と、「不連続説」に立つバイトマン（Bateman, B.）やデイヴィス（Davis, J. B.）との意見の対立が見られたのである。

しかし、そういう分類がよいかどうか、そこには疑問の余地が大いにあるのであって、ケインズの所説への第一次的接近として、ないしは人々の関心を呼び覚ますための手段として有益であるにしても、「連続」か「断絶」かという二者択一の課題設定そのものに、さしたる意義があるものとは思われない（267頁以下）。

考えてみれば、『確率論』における哲学的倫理的な思考——それは「人性論」的思考と言い換えられてもよい——は、一貫してその後に関心しているとみるのが自然であって、単なる連続というのでもなければ、単なる断絶というのでもない。

著者の、初期ケインズが『確率論』において

示したヒューマン・ネイチャーについての理解の深まりをもって『一般理論』は読まれるべきだ、という主張、つまり「人性論」的な基礎と考え方はケインズにおいて後年に至るまで揺らぐことなく貫かれたと見る立場、そしてそれらが『一般理論』において全面開花したと見る見方、こうした受け止め方のもっている重要性は、本書によって世に広く理解されるに相違ない。それは、従来のケインズ理解がともするとケンブリッジ学派内部の出来事としてのみ取り扱われてきたことに反省を求めることをも意味するものであり、或いはヒュームにまで、或いはパスカルに及びつつ、ケインズの思考における特質は論じられるべきものであって、西欧思想の幅広い潮流の中にケインズを位置づける必要のあることを主張するものとなっているのである。

3. 「不確実性 (uncertainty)」という問題

ケインズの考え方の根源に「不確実性」の問題がある。著者は、こうした点からして、ケインズの経済学を「不確実性の経済学」とでも名づけられるものであることを示唆している（203頁）。

不確実性というのは、まさに日々の人生の歩みそのものである。「完全予見」に基づいて、将来が見通せての合理的な判断というのではないから、将来に向けての「功利計算」に限界があるどころが、そもそも「功利計算」などということ自身が成り立つすべがないのである。

ここで注意を要するのは、ケインズがいう「不確実性」なるものは、新古典派がいう「リスク」とは根本的に異なっている、という点である。すなわち「ケインズが注目した『不確実

性』の問題とは、保険数学的な確率計算その他の計算がまったく不可能な次元の問題だったのである。それは、われわれの判断の基礎そのものが、何らかの理由によって、突然の動揺を余儀なくされ、確信の度合いそのものが不規則に激動するような種類の問題であった。」(204頁)

そして、こうした「不確実性」についての認識こそ、ケインズの経済学を「貨幣経済学」たらしめる根源であったのである。

4. 貨幣と利子の経済学

ケインズによれば、古典派経済学は、貨幣ないし富の問題をほんとうには取り上げてこなかった。その理由は、貨幣ないし富の問題は、不確実性の問題と密接に関連するからであって、不確実性についての認識に欠ける古典派経済学が、貨幣ないし富の問題に踏み込むことが出来なかったのは当然のことといつてよいのである。

すなわち、古典派経済学は、貨幣を計算貨幣ないし交換手段として取り扱うことはあっても、富の貯蔵庫としての貨幣には到底、眼が及ばなかったのである。

何ゆえに人は貨幣を富の貯蔵庫として用いるのだろうか。人は何故、収益を生むことのない貨幣を保有しようとするのだろうか。その理由こそ、将来への不安にあるのであって、将来の不確実性に対処するために価値の保蔵手段として貨幣を保持しようとするのである(序 iv)。「その他の資産ではなく、何故貨幣が富の貯蔵庫として使用されるのか」といふと、それは、富の倉庫として貨幣を保蔵しようというわれわれの欲求が、『未来に関するわれわれ自身の予想と慣習とに対する不信の程度を示すバロメー

ター』となるからであった。」(206頁)

「古典派経済学者たちは、貨幣のこのような機能を本当には理解することができなかった。彼らが注目したのは、利子率ではなく、貨幣の量であり、しかもその貨幣量は、流通速度を一定とすれば、価格水準に比例的に影響を与えるものと考えられたのであった。しかし人々の確信の程度によって変化するのは、貨幣の保有量ではなく、人々が貨幣をそれ以上保蔵しないようにするために提供されなければならないプレミアム水準、すなわち利子率なのである。人々の貨幣の保蔵性向、すなわち『流動性選好』の変化は、価格や貨幣量にはではなく、利子率に影響を与える。利子率は、人々に貨幣以外の形で富を保有させるために提供されなければならないプレミアムを測定する。これが、ケインズの貨幣・利子理論のエッセンスであった。」(206頁)

こうしてケインズ経済学の『『中心的な主題』は、『不確実性と貨幣的理論』の研究ということに要約されるのであった。」(207頁)

こういうケインズ理論の特性からすれば、ヒックスが提案した「IS-LMモデル」は、ケインズにとっては受け入れがたいものであった。すなわち、ヒックスの思考は、ワルラス＝パレート流の一般均衡理論の考え方に基づくものであって、そこでは貨幣は中立的な存在として処理されていた。しかし、ケインズ理論においては、貨幣は生産や投資に向けて、そして更には所得や雇用に大きな影響を与える積極的な役割を果たすものと考えられていたのである。換言すれば、ヒックスの場合には「完全予見」といふことが前提とされていたのであって、ケインズにおける「不確実性」の前提とは全く相容れない性格のものであったからである(230

頁)。

5. ケインズ『確率論』における倫理性

ケインズにおける「不確実性」理解の根源には、彼の『確率論』の世界がある。この『確率論』の世界をどう受け止めるか、そのこと自身、大きな課題である。著者は、この点について次のように語っている。これは、剋目すべき論点である。

すなわち、「ケインズの貢献は、16-17世紀の人間の『不確実性』に関する倫理的な議論へとわれわれの研究を暗に導いてくれたことにあると考えている。」「16-17世紀には、信仰なき人間の理性に対する近代的な批判が、パスカルにおけるように、その頂点に達していたのである。経済学が功利主義という偽の個人主義や思い上がった合理主義的理性信仰に依拠してきたことに対する本当の批判は、このような倫理的な立場に立つものでなければならない。」(321頁)

それは、「神」ないし、ヤスパース(1883-1969)のいう「超越者」の下において、人間の相対性と有限性とを厳しく認識することの必要と結びつく。「人間の理性は不確実なものにすぎないが、ただ信仰によって支えられることによってのみ、漸進的に真理に近づくことができる。」パスカルの『パンセ』は「思考する有限な存在としての人間の尊厳と、人間理性の限界」とを同時に明らかにしたものとして、パスカルの倫理的立場を表現したものに他ならない。(327頁)

残念ながら、わが国において、こうした思考が育つ土壌はなかった、と評者は考える。とはいえ、清沢満之(1863-1903)以降の近代の思

想家において、無限なるものを根拠に人間存在を相対化し、《煩惱具足の凡夫》として自らを認識する潮流があり、この中に、相似の思考が見られるというに止まるのである。

それはともかく、著者は、ケインズについて「現代のモラリスト」という評価があることに深く興味を示され、そうした姿勢の中に私たちの進むべき道があるのではないかと考えておられるように思われる。

6. The General Theory and After

ケインズの英文の著作集第14巻は、The General Theory and After: Part II・Defence and Development と題されている。

この巻における資料を見ると、『一般理論』発表後、ケインズ自身が既往の諸説からみると、実に遙かなたに來てしまったことを改めて実感し、そのゆえに既往の諸学説への対応が、多様にして多岐、複雑にして多角的なものとならざるをえないことをケインズ自身が改めて痛感させられ、それら諸説への応接に手間取っている様子がよく理解できるのである。

それまでの古典派経済学から、遙かなたに來てしまったケインズ自身の当惑、そうしたケインズの多様な側面をくまなくフォローされ、これを人々に知らしめようとするものとして、本書は不朽の地位を得るものとなるに相違ない。満腔の敬意を表しつつ、擱筆する次第である。

(神奈川大学名誉教授)